



# 思齊のしせい

大阪府立思齊支援学校 支援室だより

第51号

令和3年11月16日

今号も愛着障害についてのお話です。担当は中学部の上田です。今号は、愛着障害のある子どもの対応において、具体的な例を取り上げながら「してはいけない」対応を確認してみましょう。

## 事例でわかる！「してはいけない」対応

愛着障害のある子どもには、よかれと思って行った対応が、結果的に愛着障害の特徴を増幅してしまうということがあります。今回は具体的な事例を通して、愛着障害のある子どもに「してはいけない」対応を確認していきましょう。

### 子どもの要求に応えるだけの対応をしてはいけない！

事例1：小学校3年生の男児Jさん。支援員が寄り添う「一対一」の支援体制がとられている。しかし、Jさんは授業中、すぐに教室を飛び出す。支援員が追いかけると、こちらを確認しつつ、さらに逃げ回る。



「一対一」の個別支援体制がとられているにもかかわらず、キーパーソン（支援員）と子どもとの関係性の問題として、子どもがいつも「主導権」を握り、支援員はその対応に追われているため、支援が効果を持たない。追いかせさせるために、Jさんは飛び出しているため、追いかければ追いかけるほど、その現象がエスカレートした。（＝愛情欲求エスカレート現象）

子どもが主導権を握ったままでの状況では、支援の効果は期待できないので、「戻ろう。」ではなく「教室へ戻って、〇〇をやって。」などのことばで、先手の支援を行い、主導権がこちらにある状態にすることがポイント。

### 不適切行動を無視する対応の誤り！

事例2：小学校5年生のクラス。他のクラスのSさんが入り込んで、授業妨害になる行為をしたり、クラスの子どもの不適切行動を誘ったりする。注意すると、Sさんは暴言を吐き、暴力を振るう。見て見ないふりをすると、授業妨害がますますひどくなり、モノを投げ散らかしたり、取ったりする。



子どもの不適切な行動に対して「無視する」「取り上げない」という対応が推奨されることがある。生じた行動に強化を与えない対応をすることで、その行動を消滅させやすいためである。しかし、愛着障害のある子どもに対しては「無視する」という対応は効果がないばかりか不適切行動を増やしたり、激化させたりする。

愛着障害の対応においては、不適切な行動を放置して消滅させようとするのではなく、こちらが主導権を握り、適切な行動をするように誘い、そのほうがポジティブな感情が生じるとわかるような支援が必要。



2つの事例より…

愛着の問題への支援では、キーパーソンを決め、先手・主導権の支援からポジティブな感情を確認していく「愛情欲求行動への支援」がまず必要となる！！